



啓明学園の救命訓練

が来る気配はありません。そのうちに、隣に並んでいる人同士の間で、会話が生まれるようになりました。私のすぐ前にいた、ディズニーランドの袋を抱えた高校生のグループは、新幹線で新潟へ帰るはずで、とりあえず東京駅に行きたいと並んだということでした。心細いことだろうと思いましたが、周りの人たちがなぐさめたり励ましたりしていました。さらに1時間ほどたちましたが、バスは来ないし、寒さも募ってくるので、諦めて歩こうという人が出てきました。新潟の高校生たちには、東京駅の方向へ行くから道を教えてあげようという人がいて、一緒に出発していきました。私も青山通りを歩き始めました。歩道はいっぱいですれ違うのがたいへんくらいでしたが、みんな黙々と歩いており、週末の夜に歩くのをむしろ楽しんでいるように見える人たちもいました。広域避難所になっている大学の近くを通ると、職員の方が通りに立って、避難所に来る人たちを誘導していました。こんなに短時間で避難所を立ち上げるとはたいたしたものだと思います。

渋谷から虎ノ門まで、1時間余りかかりました。道路は渋滞がひどく、これではバスが来ないはずだと納得しました。歩道に人があふれ、ファストフードの店などに行列ができていましたが、それほど混乱した様子はなく、不穏な感じを受けることは全くありませんでした。

その日に、都心には相当の数の人がいたはずですが、この人たちが互いに争いを始めたり、パニックを起こして暴れたりしたら、さらに大きな悲劇が起きていたことでしょう。しかし、そうはなりませんでした。

災害のときの日本人の冷静さ、辛抱強さは、海外の人たちから驚きの目で見られます。その後の報道で見る被災地の方々の行動は、同じ日本人の目から見ても感動的なほどでした。このような力が、日本の文化の中にあるのだとしたら、私たちはそれを守っていかなければならないと思います。

## ◆その後

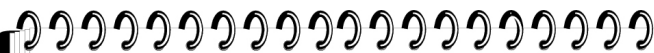
地震のない所から日本に来た人たちには、この経験は耐えられないほどのショックだったことでしょう。特に、日本語に堪能でない人たちは、ニュースの内容も十分に理解することができず、大きな不安にさらされたにちがひありません。私の学校のオーストラリア人の先生は、その日のうちに、メールで、週明けから出勤することはできないと伝えてきました。彼女は次の週、別れを告げる暇もなく帰国して行きました。

学校は地震の被害をほとんど受けなかったもので、私は、月曜日から平常授業ができるだろうと思っていました。しかし、原子力発電所の事故から、電力不足で計画停電や電車の運休があり、数日間は休校を余儀なくされました。不幸中の幸いというか、3月の終わりで、授業はほとんど終わっていたので、実際の影響は卒業式や終業式などの行事や、クラブ活動などの範囲にとどまり、生徒たちの学習への影響は最小限で済みしました。4月に入る頃には、ほぼ通常に近い生活ができるようになりました。

しかし、原子力発電所の事故をうけて、いくつかの大使館等が自国民に東京エリアからの退去を勧め、何人かの生徒たちは日本を離れて新学期を迎えることになりました。私たちのドイツ語の先生も急遽帰国してしまったので、慌てて代わりの先生を探さなければならませんでした。

初めて経験することをどう受け取るかは、育ちや文化、立場などによって、大きく違うのだということが分かります。海外に住んでいる方々は、その地の報道や人々とのコミュニケーションを通して、さらに違う見方や感じ方を知ったことでしょう。

日本は、阪神淡路大震災からも、関東大震災からも、太平洋戦争の戦災からも立ち直った歴史を持っています。まだまだいろいろな不安から解放されたわけではありませんが、復興への歩みは、すでに始まっています。この災害からできるだけたくさんの教訓を学び、それを次の世代に伝えていくことが、多くの犠牲を希望に結びつけることになるのだと思います。



啓明学園 初等学校・中学校・高等学校  
国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15

TEL : 042-541-1003

HP : [www.keimei.ac.jp](http://www.keimei.ac.jp) E-mail : [kokusai\\_info@keimei.ac.jp](mailto:kokusai_info@keimei.ac.jp)



3月の東北大震災の発生直後から2週間あまりの間の佐々先生の震災体験記です。先生は災害の真っ只中にある人々の行動や振る舞いに目を向けておられます。ヨーロッパやアメリカで10年以上の生活経験で得た先生の感性のような気がします。

滞米30年の私も人々の行動に文化や社会の違いを感じますから。